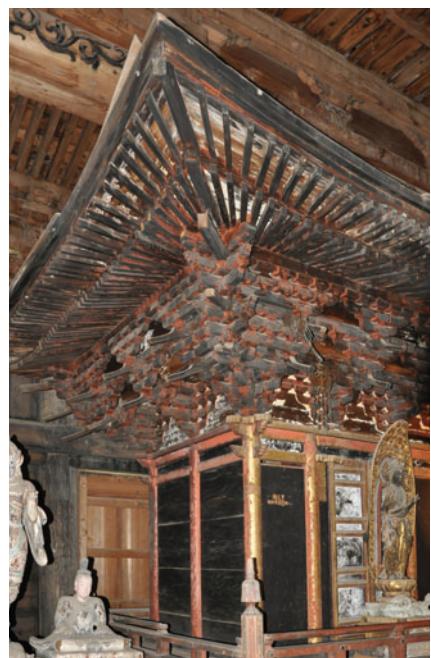




絵図は必ずしも信用するに値するか判らないが、『新編会津風土記』に掲載された「観音堂図」では、3棟の氷餅蔵が存在し、観音堂の規模も現在と異なっている。

少なくとも江戸時代後期の観音堂が、厨子を収納することを前提に造立されたものであるなら、柱をつぎ足すことで十分な小屋の高さを確保することは可能であった筈で、単なる計画ミスでは済まされない。ちなみに、本厨子は東北地方最古の禅宗様建築である。



⑭大宝院不動堂（町重文） 赤留

千鳥破風を持つ一間向拝付き三間四方堂。斗棋は禅宗様三手先の二軒繁極で、六枝掛けを基本とした大工技術であると推測される。

その力量は向拝柱の透し彫りに遺憾なく発揮されてはいるが、江戸時代後期の建築の代表的な姿といえよう。不動堂には文政4年（1821）と文化6年（1809）という年紀のある2枚の棟札が残されているため、その棟札の記載内容を次頁に示す。



【棟札 1】

(表)

「 文政四巳年 高田村
赤留不動明王 儀圓院法
七月吉祥日 石切屋 」

(裏)

「 石田半左衛 長谷川常左衛門 大竹庄傳□ 山野又兵衛
五十嵐孫兵衛 天野鉄右衛門 山内家九衛門 棟形庄衛門
大□吉兵衛 鎏方嘉右衛門 白岩無左衛門 大竹喜三郎
文化六年巳秋 関 小三郎
 宮□九兵衛
奉構營三間四面不動堂一宇世話人 同 小□□衛
 大竹□□衛門
八月廿五日 富田義三郎 若林仁六 大満三右衛門 同 仁兵衛
 大野清兵衛 大野傳三郎 大竹治郎三郎 □田弥
 富田浅治郎 大竹武右衛門 野中六蔵
 別當大悲院法印之仙我 」

この棟札の裏表で年紀が異なる理由は、恐らく文化6年巳秋（1809）に堂宇建立を企図し、文政4年巳秋に竣工したことを意味しているものと推測され、実に12年の歳月を要した大事業ということができる。

【棟札 2】

(表)

「 棟札 不動御礼
 文政四年巳三月□□ 赤留村人 不動尊 」

(裏)

「 脇棟梁越國燕町田村源治 桧木挽棟梁
後見越國鷲町田村清公 當國當所若林寅二良 當國當村齋籐文治
 越國出雲崎高橋松藏 同 阿部八十八
 同國逆瀬右□中野平吉 同 若林源治
 大棟梁當國當所鈴木源五郎 越國□曾村 槟六
 彫師
 當國矢木澤村小熊万吉 越國小池村田村寅蔵
 越國□沼町松沢助治 同國田子嶋村内藤源七
 脇棟梁當國坂下佐蔵弥太良 同國小沼村田村甚治郎 」

【棟札 2】によれば、赤留不動堂の造立には多くの越後大工が関わっており、その指導の下に地元大工脇棟梁坂下佐蔵弥太良、若林寅二良、齋籐文治、矢木澤村小熊万吉等が造営に携わっていたことが確認されるとともに、造営完了が文政4年巳秋であったことも確かなものとされる。



特に留意する技術体系としては、江戸時代では用いられることが少なくなってきた地樋を中央の大瓶束で支えられた通し貫の枠組みまで引き入れた「組み入れ天井」の小屋組み形式を採用している点で、これは鎌倉時代に普及した禅宗様式三間仏堂の基本形式である。

不動堂の天井絵については、法用寺の子安地蔵堂との関係を窺うこともできる。

法用寺子安觀音堂の造立が寛延元年（1748）頃であり、赤留大宝院不動堂の造立着手の文化6年巳秋（1809）との間には61年という歳月の開きがあることから、大工技術者の直接的関連性を求めるることはできない。また、不動堂の造立にあたっては越後国の大工たちが技術的指導者として招聘されており、彫物師の技術は確実に時代の変化を伝えている。

一方、不動堂の天井絵は纖細な線描と白の効果的な使用というその描写手法から、法用寺子安地蔵堂の天井絵と同一系統の絵師の関与が想定され、絵師がこの地方に一つの集団的活動を展開させていたことを窺わせる貴重な資料でもある。



また、向拝の虹梁に用いられた絵様縁型は華やかさを増すと同時に修驗道特有の絵様が強く意識されていることを確認することができる。

不動堂内の厨子については、禅宗様式を基本とする六枝掛けによるものと考えられるが、斗栱は敢えて詰組とせず、一つ置きに蟇股を配置し、その上部は黒塗りの通し肘木で金箔の三手先組み物と蟇股を浮き立たせる手法を採っている。頭貫鼻の縁型は古式禅宗様を思わせるも、渦絵様や欄間彫刻は江戸時代後期のもので埋められており、不動堂造営を担当した大工とは担当を別にした彫り物師の手になるものと推定され、越後の指物師の関与も否定できない。

前述のことから、建造物のそのものの価値から、その視点を地域社会の文化形成史的側面に移してみると、技術の集積・技術的継承・様式的継承等の職人の文化に加えて、流通・生産・生活様式の基本として地域社会の様相が浮かび上がってくる。

これは、社会生活の原点でもあり、建築物を取り巻く環境維持の意義を再確認することで、文化財としての価値をより発揮するものと考えられる。

(狩野勝重 調査者：狩野勝重・永井康雄・遠藤広)



2 埋蔵文化財

本町の南半には大滝山山地、神籠ヶ岳山地、博士山山地、西側には明神ヶ岳山地などの山岳地域の山々があり、これと会津盆地西南縁部分が町域となっている。

本町域は大きく見れば阿賀川水系に属し、阿賀川の扇状地が町域東側に形成されている。その他のほとんどの地域は宮川水系に属する。宮川には氷玉川、藤川川、東尾岐川、赤沢川、佐賀瀬川などの支流があり、これらの支流や支流に注ぐ小河川や沢部が形成する扇状地が盆地西南縁部の地形の特徴となっている。これらの扇状地は河川の名称から藤川川扇状地、宮川扇状地、赤沢川複合扇状地、佐賀瀬川複合扇状地などと呼ばれ、大きくは上位面と低位面に分けられている。

遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の分布をみると河川の形成する河岸段丘や自然堤防、これらの扇状地上に立地するものがほとんどである。現在のところ、会津美里町で確認、登録されている遺跡数は284か所となっている。以下、時期ごとにその分布と特徴を概観してみたい。

①旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺物は冴宮西遺跡、鹿島遺跡などで断片的に知られているが、その分布の特徴については今後の遺跡の確認作業が必要である。

縄文時代の遺跡をみると、会津盆地西縁・南縁の扇状地、および宮川上流の松坂地区の河岸段丘等に集中部が認められる。特に遺跡数の多い盆地西縁扇状地においては、上位の扇状地に立地する遺跡が多く、現在の集落よりも扇頂寄り（高位）に立地する傾向が顕著に認められる。

本町の縄文時代の遺跡の特徴として、早期・前期といった、縄文時代でも前半期の遺跡が多いという点があげられる。これは会津地域の他の地域では見られない特徴ということができる。

約5,500年前、会津地域に一大事件が勃発した。会津盆地西縁から約20km余り西の沼沢山が大爆発したのである。現在の沼沢湖はこの爆発によって生じたカルデラ湖である。この爆発で大量の火山灰や軽石が降下、あるいは地表を流れ、大きな被害をもたらしたものと考えられる。また、大量の噴出物は只見川・阿賀川を流下し、狭い峡谷部で川を堰き止め、上流は一時的に湖沼となり、堰き止め一湖の形成一決壊一堰き止めを繰り返し、大量の軽石、砂などからなる二次堆積物が堆積した。過去の一萬年間を振り返っても、もっとも甚大な被害をもたらした火山災害と考えられる。

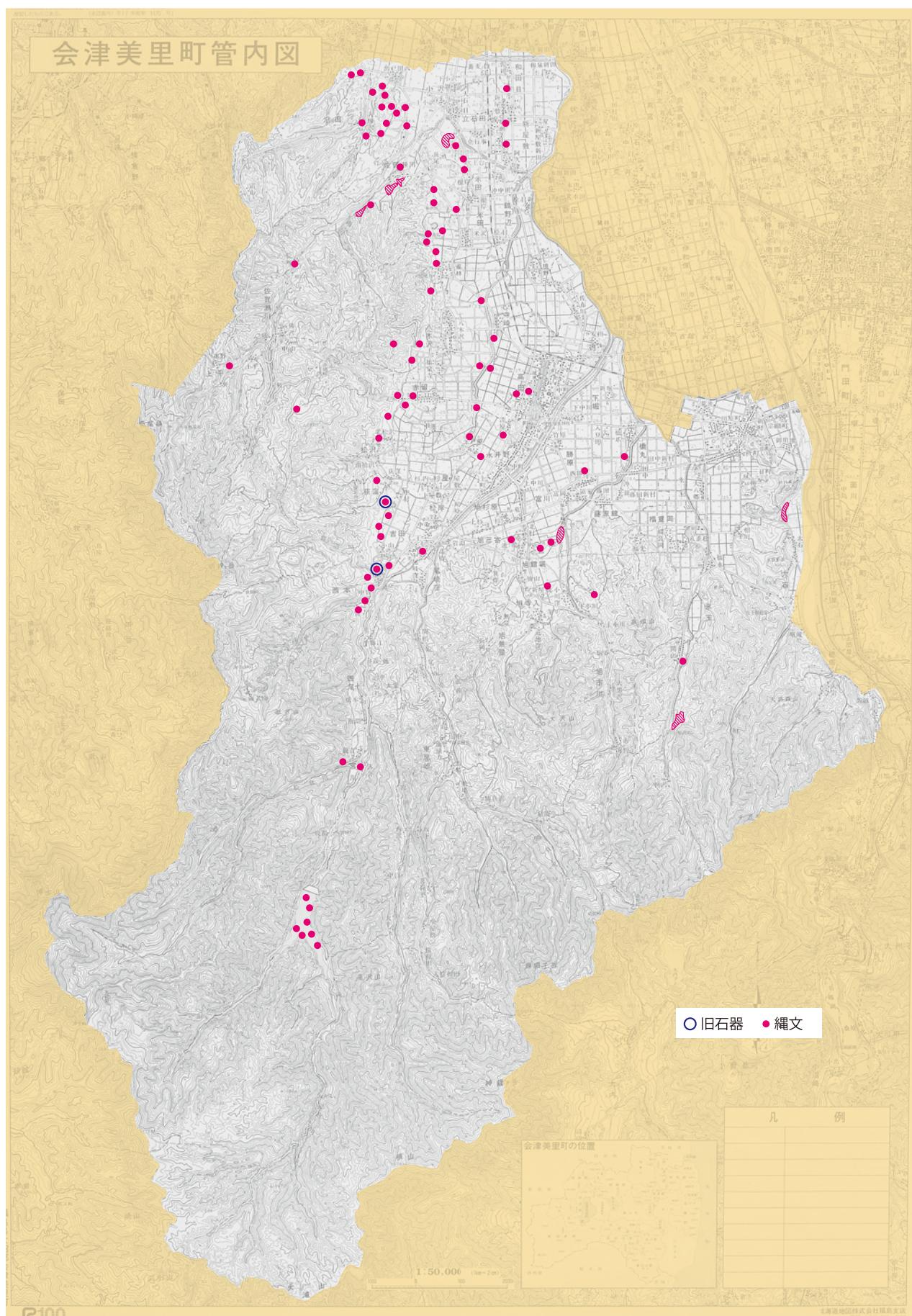
本町域には堰き止め湖は形成されていないが、遺跡の発掘調査によれば、一円に火山灰や軽石が降下し、低地を埋める堆積物は火碎流（軽石流）堆積物である可能性も指摘されている。先に触れたように町内には縄文時代前期の遺跡が多く、火山性の堆積物と土器型式の関係が町内の鹿島遺跡や冴宮西遺跡などで分析され、沼沢山の噴火が縄文時代前期最終末の出来事であったことが明らかにされている。

沼沢山の噴火時前後の遺跡様相をみると噴火の前後で遺跡が継続する例と噴火を期に廃絶する遺跡があることが指摘されている。また、噴火直後の中期初頭の遺跡が著しく減少すること、あるいは以前の立地と異なる場所に形成される例がある点も注意されている。噴火活動は広範囲に直接的な爪痕を残すとともに環境にも大きな影響を与え、縄文人の生活にも重大な打撃を与えたことであろう。

遺跡が多く、噴火口に近接する本町のこの時期の縄文時代遺跡の分析は災害に対する縄文人の対応を知る上で、災害史の視点からも重要な意味を持つと考えられ、今後の研究の成果が期待されている。

②弥生時代

弥生時代の遺跡も縄文時代と同じく盆地西・南縁の扇状地や河岸段丘、自然堤防上に立地している。その多くは縄文時代の遺跡と重なっている。縄文時代の遺跡に比べて数は少ないが、存続期間の長短



旧石器出土の遺跡と縄文時代の遺跡分布

を考慮すれば当然の結果ともいえる。

調査された遺跡は多くはないが、油田遺跡、権現山下遺跡等でまとまった資料が確認されている。油田遺跡では再葬墓、土坑墓からなる墓域が確認されており、両者が一時、共存している等貴重な知見が得られている。これらの状況をみると先に多くの完形品が出土している五本松遺跡もまた、墓域の一部であった可能性が高い。

本町域の弥生時代の特徴を示すものに油田、権現山下遺跡で大量に出土している打製石斧がある。打製石斧は石鍬とも呼ばれ、土掘り具、または土起こし具としての機能を有すると考えられている。まず、その出土量の多さが際立っており、油田遺跡では大型蛤刃石斧13点、扁平方刃石斧2点に対して、打製石斧338点が出土している。用いられる石材をみるとそのほとんどが安山岩製である。当地域の西側には広く明神ヶ岳安山岩が分布しており、安山岩は東に向かう河川や沢部で比較的容易に入手可能な石材である。出土量の多さは石材の原産地的な様相を示しているといえるであろう。今後、これら打製石斧の製作を行った遺跡が確認される可能性もあり、また、これらの安山岩製の製品がどの範囲まで分布するのかについても興味が引かれるところである。(藤原妃敏)

③古墳時代

本町の歴史文化を見ていくにあたり、ここで扱う古墳時代から平安時代までは、文字資料がないか、あっても地域の詳細な動向を知ることができるのはきわめて少ない。そのため、主として考古資料を用いることになる。とは言え、本町では遺跡の数は多いものの発掘調査された例は少ない。したがってここでは会津盆地全体の様相をみていく中で本町の資料に触れていくことにしたい。

縄文時代に続く弥生時代の日本列島では、水稻耕作が発展する過程で社会に階級差が生じ、各地に政治的なまとまりが形成られていった。このような政治勢力の中から現在の奈良盆地南東部に倭政権が誕生し、政権の代表とその近親者の死に際し大型の前方後円（方）墳を築造した。これに呼応するように北海道と東北北部および南西諸島を除く各地でも首長墓をはじめとする古墳が盛んに造られた。この時代を「古墳時代」と呼んでおり、概ね3世紀中葉から、前方後円墳がなくなる6世紀一杯を経て7世紀まで続く。

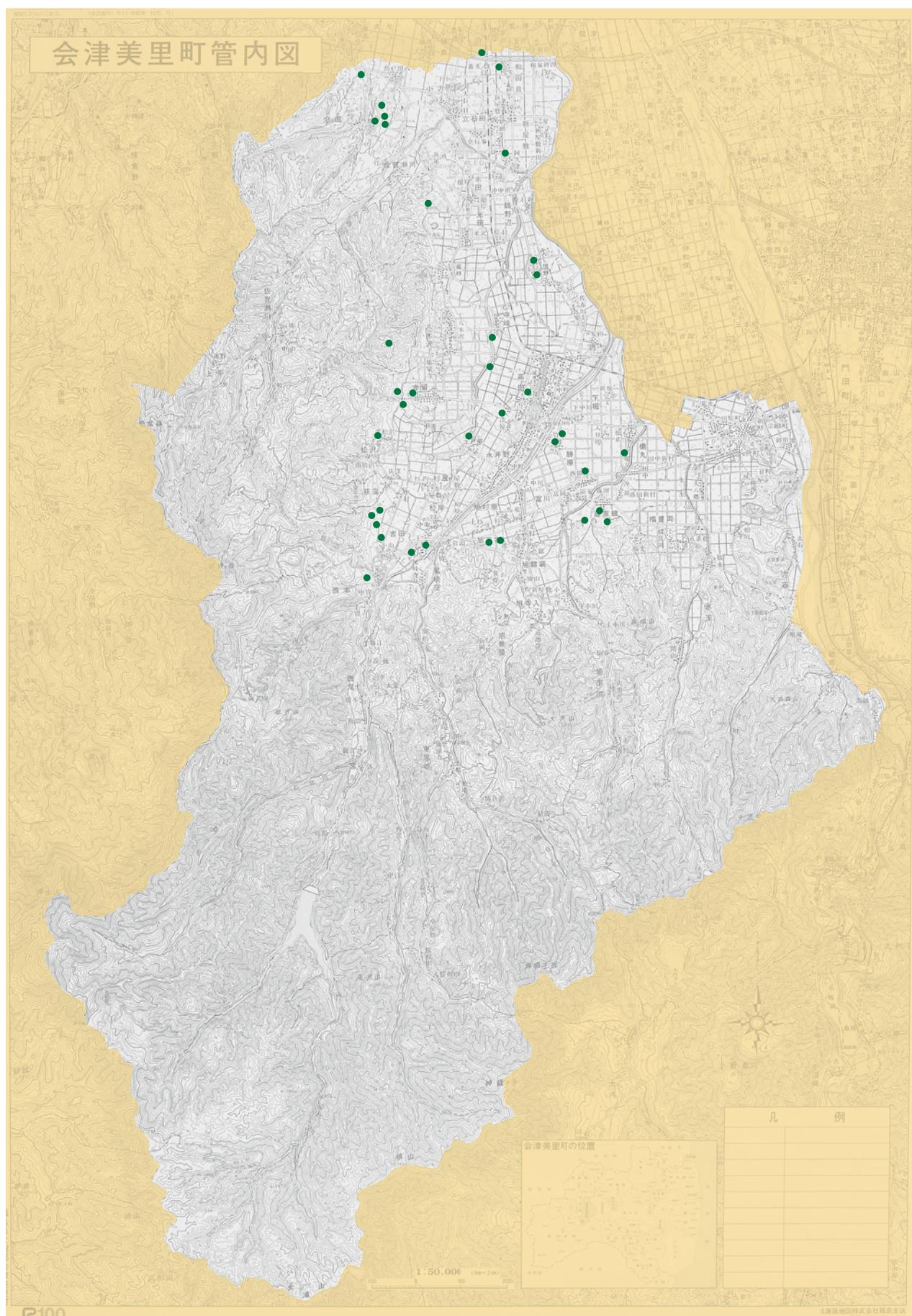
古墳時代前期の会津には大きく3ヶ所の古墳集中地帯が認められる。盆地東部の会津若松市一箕古墳群（飯盛山古墳・堂ヶ作山古墳・会津大塚山古墳等）、盆地西部の会津坂下町宇内青津古墳群のほか、会津坂下町杵ヶ森古墳、北部の喜多方市虚空蔵森古墳等からなる古墳集中地帯、盆地北東部の塙川東部、雄国山麓の古墳群（喜多方市十九壇古墳群、深沢古墳、舟森山古墳、観音森古墳等）である。これらの古墳分布地帯は、そのまま古墳時代前期における首長層の本拠と考えられる。

古墳の主を支えたこの時期の集落跡は、上記の古墳集中地帯を中心に見つかっており、竪穴住居跡や出土した土器の特徴は、北陸に起源を求められるものが多い。この時期、阿賀川を介して北陸との交流が盛んに行われていたことを物語る。

古墳時代前期における北陸起源の土器の分布をみると、中通りから阿武隈高地を越えていわきにまで達している。一方、東海地方起源の特徴的な土器が、いわき市砂畠遺跡→阿武隈高地の小野町落合遺跡→会津若松市郡山遺跡で出土している。



会津盆地の3つの古墳群



のことから、古墳時代前期には沿岸や阿武隈川流域の南北交流だけでなく、太平洋側と日本海側を結ぶルートも開発され、山地を越えた東西交流によってヒト・モノ・情報が行き来していたことが分かる。

現在のところ、本町でこの時期の古墳あるいは集落等のまとまった資料は発見されていないが、それが必ずしもこの時期の歴史が存在しないことを意味するものではなく、至近にあった同時期の首長層の傘下に属していた地域と解することができよう。

古墳時代中期（概ね4世紀末～5世紀）の古墳には、会津坂下町の長井前ノ山古墳、喜多方市明蓮寺古墳群、同灰塚山古墳等がある。この時期の倭政権は活発に韓半島との交流を行っていたため、先進の文物が倭国にもたらされた。竪穴住居に付設された竈は代表的なもので、古墳時代中期後半以降、発掘によって竪穴住居跡が確認される10世紀前半頃まで長く在地の消費生活を支えた。また、韓半島からの工人と技術を基に、大阪府南部の陶邑古窯跡群等で須恵器が生産された。喜多方市の明蓮寺1号墳や会津坂下町中平遺跡、豪族居館と考えられる喜多方市古屋敷遺跡等でこの時期の須恵器が出土している。高田地域の油田遺跡でもこの時期の竪穴住居跡から須恵器の环が出土している。

中期後半から末には、内面を黒色処理した环が現れる。この時期、竈に据え置くために長胴化した土師器の甕の中には、胴部外面にハケ調整された個体が目立つようになる。中期末の会津坂下町中平遺跡で出土した环内面はすでに多くが黒色処理され、同じく会津若松市村西遺跡では外面にハケ調整された甕が目立つ。黒色処理された环や外面にハケ調整された長胴甕は、中部高地から北陸北東部にかけての特徴であり、後期になって一般化する太平洋側とは異なり、阿賀（野）川を介して現在の新潟から一步先に伝わった要素と考えられる。

概ね6世紀に当たる後期の集落跡には、高田地域の十五壇遺跡や竹原遺跡、会津坂下町の宮ノ北遺跡や樋渡台畠遺跡等が挙げられる。十五壇遺跡は、会津盆地では数少ない後期前半の集落跡である。

会津盆地で後期に築造された目立つ古墳は見られない。高田に所在する10基ほどの円墳からなる藤田古墳群は、築造時期や埋葬施設の内容が明らかではないものの、後期か終末期の古墳群であろう。また、新鶴の向山横穴群も終末期の墓制である可能性が高い。

古墳時代の後期から終末期のある時期に、地方の行政官として国造が任命される。太平洋側では、阿武隈川河口付近以南に置かれたが、これは、当時の倭政権の版図を示すものである。一方、会津は広大な地ではあるものの国造が設置されたとの記録はない。国造の國はその後「評」に転換し、「(陸奥)國」の下部行政単位となり、名称も「郡」と呼ばれるようになり奈良時代に至る。

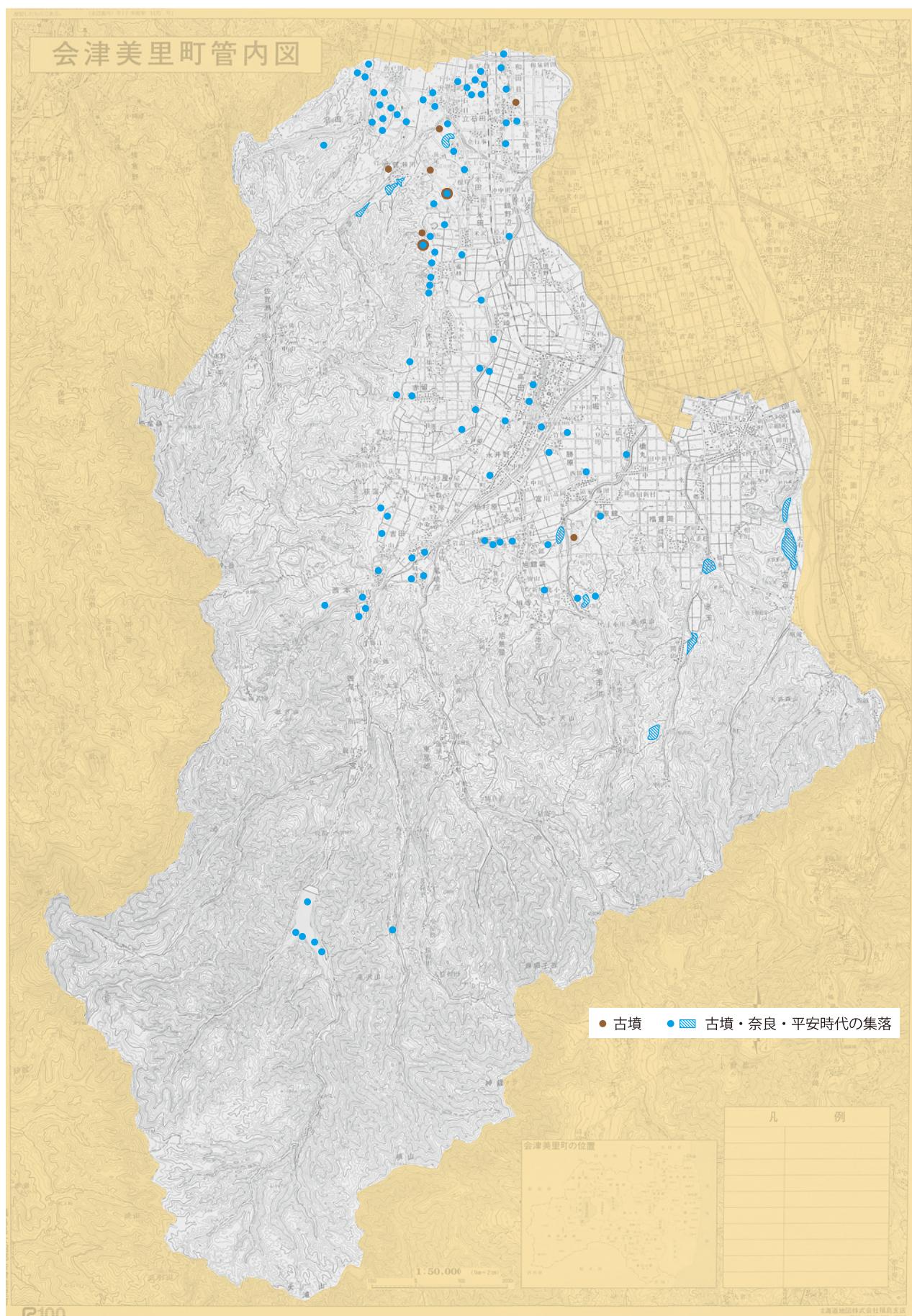
④奈良・平安時代

奈良時代の会津盆地は、概ね陸奥国会津郡に属し（718年から数年間は石背国）、承和7（840）年までの間に日橋川・阿賀川北岸域と猪苗代北岸域を割いて耶麻郡が分置され、その後、分立の経緯には諸説あるものの古代末までに4郡となった。

7世紀中葉の陸奥国成立の時期になると、それまで若干の地域色がみられた日常什器の甕や环等の土器は、陸奥国一円に分布する長胴のハケ調整甕と有段丸底环が特徴の栗団式に統一される。これは国単位の所属意識の反映と思われる。

奈良時代末から平安時代になると、須恵器の製作技法から学んだロクロにより整形された土師器が用いられるようになる。中でも丸底を志向した長胴甕のほか鍋等、陸奥国南部に普及する煮炊具とは異なるものが見られる。

丸底の長胴甕は、高田地域の権現山下遺跡や喜多方市塚田A・B遺跡、同館ノ内遺跡等で出土して



おり、高田地域の下堀際遺跡でも丸底の可能性がある甕や小さい底部の甕が出土している。会津では、陸奥国の太平洋側と同様に平底甕も混在するが、その径は小さい。これら丸底を志向した土師器甕や鍋は、出羽での在り方とも共通しており、その源流は日本海側の北陸にあるとされる。この時期の会津では、北陸や出羽と類似する消費生活をしていたことになる。

近年、会津若松市西木流C・D両遺跡にまたがる流路や溝跡で出土した、新潟市西部の窯の製品かと思われる、「梓 今来」の刻書のある須恵器等の分析から、8世紀後半から9世紀前葉に、北陸からの渡来系氏族を含む移住が推定されている。会津盆地における強い北陸色の要素は古い時代からの伝統ではあるものの、その時々の受容の契機も明らかにされつつある。

奈良時代より前に評^{こおり}が設置されて以降、素焼きの土師器に加え在地の窯によって瓦や須恵器が焼成された。前者は主として官衙や寺院に、後者は地域の有力者層等にも供給された。地方窯の出現は、律令国家の成立とともに郡ごとに整備されていくが、その初期にあたる西暦700年前後の窯として、会津若松市の村北瓦窯跡が知られている。この窯から出土した雷文縁の軒先瓦は奇しくも窯に残ったが、製品のほとんどは陸奥国会津郡衙と思われる会津若松市郡山遺跡に供給された可能性が高い。会津盆地ではその後、8世紀後半に盆地南東部の会津若松市大戸窯跡群、南西部の新鶴大久保窯が操業された。10世紀まで長期にわたって継続した大戸窯跡群の製品は陸奥各所の広域に供給された。一方、大久保窯は8世紀後半代のみの小規模で一過性の窯である。その構造は地下式であること、高台端が突出する形状の長頸瓶が含まれている点から、開窯に当たり技術系譜の一部を大戸窯の初期と共にしていた可能性が高い。

奈良時代から平安時代にかけた集落跡は盆地床で多く発見されている。集落跡には竪穴住居跡の他に、もともと官衙など公的機関で採用された掘立柱建物跡を多用したいわゆる富豪層の居宅も散見される。高田地域の油田遺跡の平安時代集落は、格調の高い四面庇付の掘立柱建物を中心に竪穴住居跡が混在する形態である。9世紀前葉から中葉まで継続したこの屋敷地からは円面硯が出土していることから、文字を知る富豪層の居宅と考えられている。油田遺跡のこの屋敷は、平安時代初期の会津郡を支えた盆地南西部の政治的・経済的拠点であった可能性が高い。また、この時期のやや散漫な建物配置は日本海側特有の地域性とも言われている。

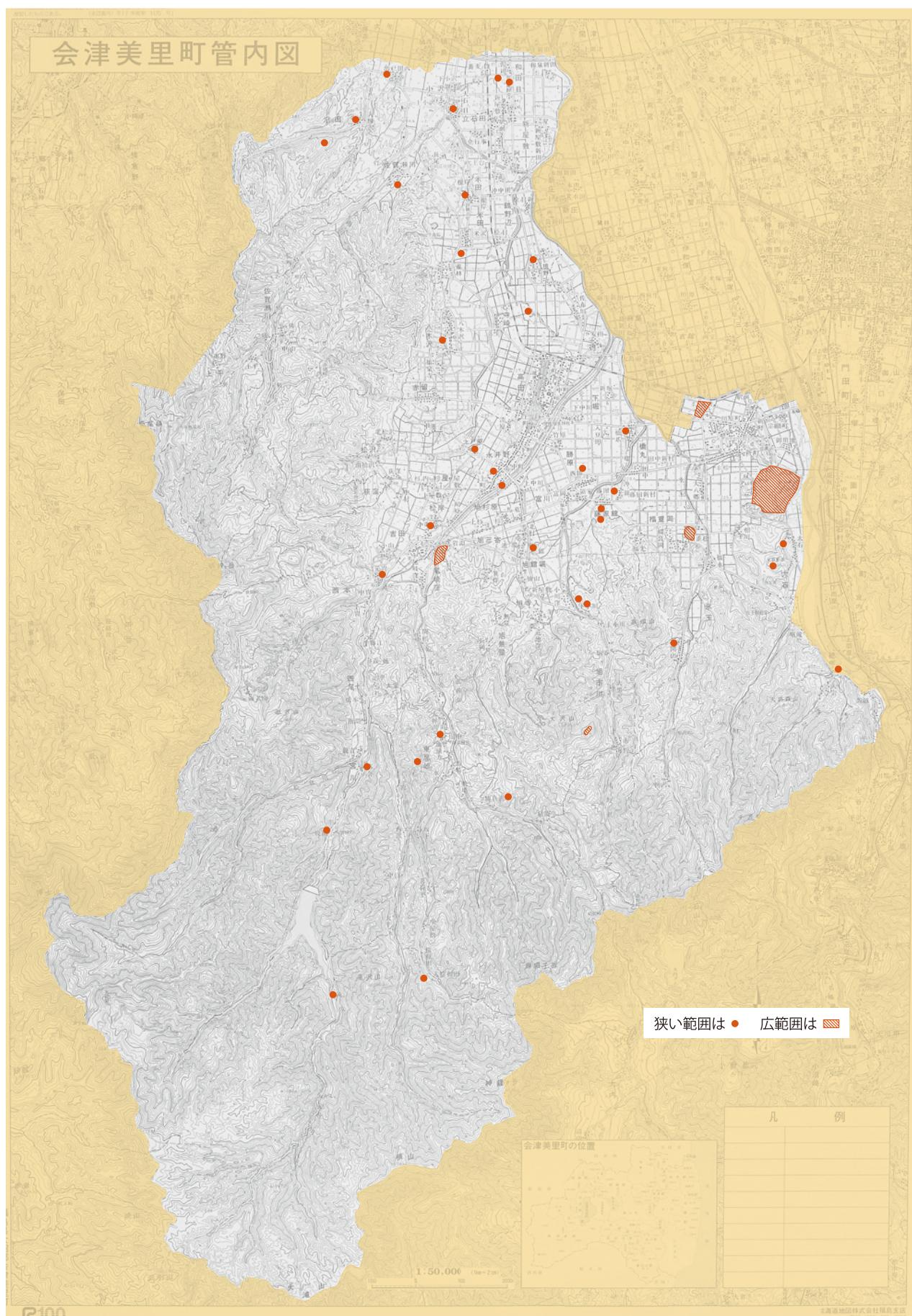
以上、本町における古墳時代から平安時代までの動向を、会津盆地全体を概観する形でみてきたが、古墳時代中期の文物の入手経路が不明であるとの終末期の一時期を除き、会津盆地は北陸との関係がきわめて深い地域であることが改めて浮き彫りになった。会津盆地南西部に位置する本町は、盆地東半部より一層その傾向が強いと思われる。（柳沼賢治）

⑤中世城館

中世城館には現集落と重複、あるいは近接するものと、山岳地域に立地する山城がある。居館と戦闘あるいは逃げ込むための山城など性格の違いが想定される。

代表的な城館として、蘆名盛氏が築城したとされる向羽黒山城跡がある。南北600m、東西550mの壮大な城館で、その重要性から史跡に指定されている。

遺跡の立地を見ると、河岸段丘や扇状地上に営まれているものがほとんどである。特に奈良・平安時代の集落や中世の居館は現在の集落と重なり合う場合が多い。これは低位の氾濫原より水害の影響を受けにくくこと、地盤が強固であること、扇状地に特有の湧水地が生活に欠かせなかったこと等共通の立地条件があることによるものと考えられる。（藤原妃敏）



中世城館の遺跡分布

3 神社仏閣

■主な神社一覧 (『会津高田町史』『本郷町史』『奥州会津新鶴村誌』より抜粋)

地域	番号	名称	祭神	創建	所在地	備考
高田	1	伊佐須美神社	伊弉諾尊・伊弉冉尊・大彦命・武沼河別命	欽明天皇13年(552)、今地に祀る	高田	初め、御神楽岳に祀り、次に博士山、それより明神ヶ岳に遷った後、現在地に遷る
	2	手児神社	素盞鳴命		松岸	伊佐須美神社が遷座された時に勧請したといわれる
	3	熊野神社	伊弉諾尊・速玉男命・須佐男命・事解男命		永井野	
	4	金跨神社	塩土老翁・伊弉諾尊・伊弉冉尊・誉田別尊	嘉元元年(1303) 現在地に遷る	寺入	欽明天皇13年に、伊佐須美神社の祭神が明神ヶ岳より現在地に遷座した時、手児神社とこの神社の2神が随神として従ったといわれる
	5	藤田稻荷神社	倉稻魂命	文治5年(1189)の頃	藤田	
	6	大沼神社	水波能女命	大同元年(806)		「大沼郡」の郡名の起源となっている
	7	国見神社	誉田別尊・事代主命・気久利姫命・大山咋命・日本武尊	大正9年(1920)	八木沢	八木沢集落にあった6社を合祀する
	8	船岡稻荷神社	宇迦之御魂・猿田比古命・大宮比売命	長治元年(1104) といわれる	仁王	
	9	朝立神社	伊弉諾尊・伊弉冉尊・倉稻魂命・大山祇命	寛元4年(1246) に現在地に遷る	東尾岐	
	10	駒形神社	保食命	嘉永3年(1850) の勧請	御藏南	馬頭観音ともいう
	11	雷神社	大雷命		布才地	
	12	水神社	罔象女命		高田	箱清水の地に有
	13	諏訪神社	建御名方命		佐布川	村南に有 鳥居有 享保7年の石灯籠有
	14	氷川神社	須佐之男命		佐布川	
	15	熊野神社	伊奘冉尊・速玉男命・事解男命		安田	明治6年の鳥居 本殿の脇に杉の木の大木
	16	金比羅神社	大物主命		永井野上町	長尾道貫顕彰碑、文久2年の狛犬一対有
	17	鬼渡神社	阿須波命・波比伎命		永井野上町	旧永井野農協裏に有 明治44年の石鳥居
	18	神明神社	天照大神		杉屋	船岡館跡に有 享保・宝永の石祠有
	19	熊野神社	伊奘冉尊・速玉男命・事解男命		上戸原	村西南に有 9月9日宵祭
	20	熊野神社	同上		松沢	明治19年の鳥居 5月2日祭礼
	21	鹿島神社	武甕槌神		荻窪	鳥居2基有 文化10年享保7年の石灯籠
	22	愛宕神社	火之加具土之命		荻窪	荻窪愛宕山中に有
	23	熊野神社	伊奘冉尊		杉原	下杉の村中に有 社号標は坂内丹四郎寄進
	24	熊野神社	伊奘冉尊		三寄	文化11年9月の二十三夜供養塔有
	25	熊野神社	伊奘冉尊		三寄	明治初期の石祠有
	26	八幡神社	品陀和氣命		市川	文明19年遠藤次義の修造 供養塔数基有
	27	稻荷神社	倉稻氣命		市川	約100段の階段 社殿の彫刻良い
	28	熊野神社	伊奘冉尊・速玉男命・事解男命		館端	
	29	熊野神社	同上		無量	

	30	鬼渡神社	阿須波命・波比伎命		寺入	天保5年の鳥居有
	31	鬼荒神社	豊城入彦命		無量	
	32	青麻神社	少彦名命		寺入	中風除けの神 明治15年の奉納昇り旗
	33	赤城神社	天児屋根命		馬ノ墓	宝暦12年の供養塔、再建記念碑等有
	34	鬼渡神社	五十猛命		箕作	鳥居有
	35	聖神社	聖命		箕作	鳥居明治23年奉納
	36	二渡神社	船玉命		富川	相殿13座 明治36年移転 石碑有
	37	熊野神社	伊奘冉尊・速玉男命・事解男命		橋爪	村南に田中集落の熊野神社と並んである
	38	熊野神社	伊奘冉尊・速玉男命・事解男命		西勝	村北に有 明治25年の鳥居 石祠5基あり
	39	稻荷神社	倉稻魂命		下堀	村中に有
	40	八幡神社	品陀別命		下堀	村南に有 明治34年の社号標 鳥居有
	41	聖神社	倉稻魂命		領家	村東に有
	42	富士神社	木花佐久夜比売命	天明5年(1785)に祀る	沖ノ館	大正3年屋根修理
	43	麓山神社	羽山津見命		雀林	村西南の山上に平成2年社殿再建
	44	稻荷神社	倉稻魂命		寺崎	鳥居有
	45	意加美神社	五意加美命		雀林	法用寺観音堂の西に有
	46	神明神社	大日碑靈貴命		赤留	9月2日宵宮祭 赤留不動尊の隣
	47	沼神社	瀬織都比売神		吉田	
	48	稻荷神社	宇迦之御魂命		吉田	別名、松掘稻荷
	49	八幡神社	品陀和氣命		吉田	立派な彫刻有
	50	八幡神社	品陀和氣命		西尾	大正9年の社号・社額は高山書 灯籠有
	51	日光神社	豊城入彦命		西尾	鳥居崩壊 日光大権現の社額有
	52	稻荷神社	倉稻魂命		西尾	村から山へ800m登る 石造鳥居柱のみ有
	53	八幡神社	品陀和氣命			村西の田の中に有 慶応元年の鳥居
	54	熊野神社	伊奘冉尊・速玉男命		西本	境内広い 本殿の中に立派な彫刻8つ有
	55	二荒神社	豊城入彦命		西本	
	56	稻荷神社	倉稻魂命		西本	
	57	聖神社	聖神		西本	
	58	熊野神社	伊奘冉尊・速玉男命・事解男命		大室	木造の太い柱の鳥居有
	59	大山祇神社	大山祇命		尾岐窪	石造・木造鳥居 昭和2年の灯籠有
	60	大山祇神社	大山祇命		宮川	鳥居有 松倉林道の起点に有
	61	船越神社	須佐能男尊		東尾岐	湯殿山の見事な大石碑有
	62	氷川神社	須佐能男尊		東尾岐	水沢と馬場の間に有 石の鳥居有
	63	二荒神社	豊城入彦命		東尾岐	鳥居有 入口に石造り地蔵尊
	64	稻荷神社	宇迦之魂命		東尾岐	元文3年奉納灯籠
	65	伊勢大神社	大日碑靈貴尊・宇迦能魂命・大山祇命		東尾岐	
本郷	66	廣瀬神社	若宇迦廻命	明治2年(1869)	本郷	明治2年、羽黒山神社・宗像神社を合祀し建立された。また、山上にある稻荷神社・大山祇神社・水神社の遥拝所でもある
	67	羽黒山神社	羽黒権現	天平の頃?(729~749)	本郷	羽黒山中腹。天平の頃に行基が羽黒権現を勧請し羽黒山北の峰に祀り、その後永禄4年蘆名氏が城を築くときに現在地に移したという

	68	宗像神社	瑞津姫・市杵島姫	神護景雲年中 (765~) ?	本郷	羽黒山中腹。
	69	八幡神社	伊弉諾命・速玉男命・事解男命		大八郷	社殿には八幡神社の板額、石の鳥居には合祀社の石額有。「八幡神社」「熊野神社」「稻荷神社」
	70	十二所神社	鷦鷯草葺不合尊	天喜2年 (1054)	館ノ廻	
	71	稻荷神社	倉稻魂命		新町	相殿二座「八幡神社」「天満神社」
	72	藤巻神社	明玉命		福永	延宝3年に五社合祀になる。
	73	高志王神社	八百姫命		福永	寛政7年に藤巻神社境内に移された
	74	熊野神社	事解男命・伊邪那美尊・速玉男命		関山	相殿四座「白幡宮」「八幡宮」「稻荷宮」「光神権現」
	75	雷神社			関山	大きな石の祠
	76	水神社	罔衆女命		関山	相殿三社「熊野宮」「権現」「雷神」
	77	聖神社	天御中主尊		福光	境内に稚木神社がある。
	78	明神社	国常立命	延宝の頃との 言い伝え	螺良岡	相殿「稻荷神社」
	79	田贏神社	国常立命	寛保2年9月か	螺良岡	明神社境内の小さな石の祠
	80	白山神社	伊那邪美命・菊理姫命	永仁5年 (1297)	八重松	「水神社」とも言われている 相殿一座「稻荷神社」
	81	稻荷神社	宇賀能御魂命	文政6年 (1823) 頃か	氷玉	「岩室さま」ともいわれている 相殿五座「明神」「山神」「幸神」「妙見」「沼御前」
	82	熊野神社	事解男命		大石	
	83	稻荷神社 (滝壺稻荷)	倉稻魂命		穂馬	命外22社合祀
	84	稻荷神社	倉稻魂命	明治5年7月	穂馬	相殿一座「明神・菅原神社」
	85	糟尾権現	糟尾宗頤		宗頤町	石の祠
新鶴	86	稻荷神社			和田目	
	87	立行事稻荷神社			立石田	

■主な仏閣一覧 (『会津高田町史』『本郷町史』『奥州会津新鶴村誌』より抜粋)

地域	番号	名称	宗派	開基	所在地	文化財
高田	1	龍興寺	天台宗	嘉祥年中 (848~850)	高田	一字蓮台法華經開結共・絹本着色両界曼荼羅・天海僧正両親の墓
	2	法幢寺	浄土宗	建治2年 (1276) 『会津温故拾要抄』 または明応3年 (1494) 『新編会津風土記』『会津鑑』	高田	銅造阿弥陀如来及両脇侍立像
	3	長光寺	時宗	文安年間 (1444~1449)	高田	木造六地蔵立像 (6躯) ・阿弥陀如来及両脇侍
	4	天王寺	天台宗		高田	
	5	清龍寺 (文殊院)	天台宗	暦応2年 (1339)	高田	智鏡塚・「芭蕉翁袖塚碑」・文殊祭
	6	心光寺	浄土宗	天文3年 (1534)	高田	
	7	普門寺 (慈光院)	天台宗	元和2年 (1616)	安田	
	8	觀音寺	曹洞宗		佐布川	木造十一面觀音立像
	9	長福寺	曹洞宗	建久9年 (1198) →享禄元年 (1528) 再興	永井野	
	10	松沢寺	曹洞宗	永享元年 (1429)	松沢	伊達政宗寄進状・松本図書父子肖像掛軸
	11	松岸寺	曹洞宗	天文19年 (1550)	松岸	鰐口
	12	高藏寺	曹洞宗	文永4年 (1267)	荻窪	
	13	正法寺	天台宗	暦応2年 (1339)	杉屋	

	14	長福寺	曹洞宗	文永 4 年 (1267)	杉原	
	15	慈徳寺	曹洞宗	文祿 4 年 (1595)	寺入	
	16	法蔵寺	曹洞宗	元和 5 年 (1619) 再興	寺入	
	17	地蔵寺	曹洞宗	慶長年間 (1596~1614) 再興	袖山	
	18	無量寺	曹洞宗	文永 6 年 (1269)	無量	
	19	館泉寺	天台宗	承暦 4 年 (1080) か	館	
	20	長福寺	真言宗	承暦 3 年 (1079) 『会津正統記』または永久 4 年 (1116) 『大沼郡誌』	長岡	
	21	光福寺	真言宗	正暦 4 年 (993) か	小川窪	
	22	松岩寺	真言宗	慶長年間 (1596~1614) ?	小川	
	23	薬師寺	天台宗	慶長元年 (1596) 再興	市野	
	24	薬師寺	天台宗	嘉祥元年 (848)	橋爪	
	25	正法寺	浄土宗		田中	
	26	正覚寺	浄土真宗		西勝	
	27	安樂寺	天台宗		西勝	
	28	今泉寺	天台宗	寛平 2 年 (890)	竹原	
	29	大光寺	天台宗	延応 2 年 (1240) 以前	藤田	大光寺供養塔 (板碑)
	30	常楽寺	曹洞宗	建長元年 (1249)	領家	
	31	福生寺	天台宗	慶長10年 (1605)	富岡	観音堂・木造十一面觀音菩薩坐像
	32	成徳寺	曹洞宗	文亀元年 (1501)	上中川	
	33	延命寺	天台宗		下中川	
	34	法用寺	天台宗	養老4年 (720)	雀林	観音堂厨子及び仏壇・三重塔・観音堂 (附金銅製十六菊花紋 4 枚)・木造金剛力士立像・木造十一面觀音立像 (2 軀)・伝木造得道上人坐像等
	35	福泉寺	天台宗	承保元年 (1074) ?	八木沢	木造薬師如来坐像
	36	常明寺	真言宗	延久 5 年 (1073)	赤留	
	37	東照寺	曹洞宗	永正元年 (1504)	赤留	
	38	仏照寺	真言宗		寺崎	
	39	仁王寺	天台宗	大同 2 年 (807)	仁王	弘安十年銘石標・仁王寺文書
	40	龍門寺	曹洞宗	明応 9 年 (1500) 以前	尾岐窪	
	41	龍淵寺	曹洞宗		小山	
	42	長泉寺	曹洞宗	16世紀中頃	遅沢	
本郷	43	圓通寺	浄土宗	永祿元年 (1558)	本郷	絵画絵馬狩野法眼画・木造阿弥陀如来坐像・木造馬頭觀音像・染付圓通寺銘釘隠
	44	常勝寺	浄土真宗	天正10年 (1582)	三日町	木造聖徳太子立像 (管理者 三日町自治区)
	45	真福寺	天台宗		上荒井	
	46	鳳來寺	真言宗	永祿年間 (1558~) 以前	螺良岡	木造薬師如来坐像
	47	円満寺	真言宗		八重松	
	48	積翠寺	曹洞宗	慶長16年 (1611) 以前	福永	木造毘沙門天立像
	49	大石寺	天台宗		大石	
	50	左下觀音寺	臨濟宗	延文3年 (1358)	左下り	左下觀音堂
	51	元慶寺	曹洞宗	宝徳3年 (1451)	堀ノ内	
	52	法蓮寺	真言宗	天長年間 (824~) 以前	上小松	
新鶴	53	興隆寺	天台宗	弘仁元年 (810)	佐賀瀬川	木造大日如来坐像
	54	常福院	真言宗	大同2年 (807)	新屋敷	薬師堂・木造田子薬師如来坐像及び脇侍日光菩薩・月光菩薩・田子薬師堂木造十二神将像
	55	弘安寺	曹洞宗	弘安2年 (1279)	米田	観音堂厨子・銅造十一面觀音及び脇侍不動明王・地蔵菩薩立像

4 主な年中行事と祭礼一覧

季節	伝統的な年中行事・祭礼
春	元朝まいり（初詣）（1月1日） 蛇の御年始（1月7日）高田地域雀林 八日市（1月8日）本郷地域 大俵引き・高田初市（1月第2土曜日）高田地域 団子さし（1月中旬） 歳の神（1月中旬） 鳥追い（1月中旬） 初午（2月最初の午の日）（立行事稻荷神社） 百万遍の数珠回し（2月最初の寅の日）新鶴地域ほか 節分（2月3日） 針供養（2月8日） 文殊祭（2月25日）高田地域 ひなまつり（3月3日） 彼岸獅子舞（3月彼岸頃）高田地域西勝 花祭り（4月8日）（田子薬師堂） 花祝祭・太々神楽（4月29日）（伊佐須美神社） 菖蒲さし（5月4日） 端午の節句（5月5日）
夏	雷神祭（6月8日） 御田植祭（7月11～13日）（伊佐須美神社） 虫送り（7月上旬～中旬）高田・新鶴地域 濑戸市（8月第1日曜日）本郷地域 七夕祭り（8月7日） お盆（8月13～17日頃）
秋	秋季祭礼（9月15日）高田・本郷地域 陶祖祭（9月16日）本郷地域 えびすこう（10月20日）
冬	菊祭り（11月上旬）（中田觀音・法用寺） 七五三の祝い（11月15日） 冬至カボチャ（冬至） 餅つき（12月28日） すすの年とり（12月29日） 大晦日（12月31日）



瀬戸市



花祭り

5 無形民俗文化財

①伊佐須美神社の御田植祭

伊佐須美神社は『延喜式』卷第十に載っている古社で、『古事記』によると崇神天皇は地方に「四道將軍」を派遣したうちの二人、大毘古命とその子建沼河別命が、のちに会津と記されるようになる相津で落ち合い、相津以北の賊の進入を防ぐために伊邪那岐命と伊邪那美命の二柱を御神楽岳に祀った。これを後に博士山に、さらに明神ヶ岳に遷したという。やがて大毘古命と建沼河別命も合祀し、現在境内地になっている南原（高天原）に、間もなく東原の現在に遷座したという。

同社の祭りは多彩であるが、ことに7月11日から13日にかけての「御田植祭」は大祭である。まず、注目すべきは12日午前の「獅子追い」である。獅子は親獅子・白獅子・葦毛駒・赤馬・鹿・白馬・先牛・後牛の八口で、仮面といっているが頭である。これに長い紅白の綱が付けてあり、数百人の童子が寄りつかまって町内を練り、本社から離れた御田神社境内の御正作田（神田）に向かう。現在は3軒だけになったが、かつては全戸に土足のまま裏口から入り、表口に突き抜けた。御正作田に着くと、仮面を持った童子は田に入り、3回まわって搔きならす。これは「田あらし」ともいって、邪氣祓いといっている。この後、この田の水に手を浸すと病気をしないという。「獅子追い」は神の来訪とも考えられる。これまで町立高田小学校の5・6年生と同中学校の全生徒約300余名であったが、平成30年から新鶴と本郷の小・中学校の同学年の児童・生徒も参加するようになったので、参加する童子は倍増した。

当社には催馬樂ともいわれる田植歌が伝えられていて、12日午後の渡御行列の間と御正作田での田植式で早乙女が早苗を植える際にうたわれる。この歌には篠笛と大拍子の囃子がつき、歌詞は記録に「催馬樂十二段」とあることから12句があったと思われるが、最後の一段は天保6年（1835）以前に失われた。歌詞は記録によって多少の相違はあるものの基本の詞型は五五七四、または五五七五で、これは定型律としては最古の五五調の名残を残しており、今日までうたい継がれている歌謡の中でも類例の少ない古調である。しかも、その旋律は六度の音程をもつ二つの音からなる素朴なもので、歌詞と旋律がともに残されているものでは県内最古といってよく、天保年間（1830～44）にはすでに中央に知られていた。

御田植祭でさらに注目すべきものは田植人形である。これは「デコ人形」ともいわれ神輿渡御に供奉し、早乙女が田植歌につれて早苗を植える田植式では畔に立てる。一般にデコといえば額、つまり「おでこ」をさすが、県内では自ら動くことのできない人形のことで、「デコ人形」といえば二重の表



獅子追い



田あらし

みょうさくでん（御正作田）に向かう。現在は3軒だけになったが、かつては全戸に土足のまま裏口から入り、表口に突き抜けた。御正作田に着くと、仮面を持った童子は田に入り、3回まわって搔きならす。これは「田あらし」ともいって、邪氣祓いといっている。この後、この田の水に手を浸すと病気をしないという。「獅子追い」は神の来訪とも考えられる。これまで町立高田小学校の5・6年生と同中学校の全生徒約300余名であったが、平成30年から新鶴と本郷の小・中学校の同学年の児童・生徒も参加するようになったので、参加する童子は倍増した。

当社には催馬樂ともいわれる田植歌が伝えられていて、12日午後の渡御行列の間と御正作田での田植式で早乙女が早苗を植える際にうたわれる。この歌には篠笛と大拍子の囃子がつき、歌詞は記録に「催馬樂十二段」とあることから12句があったと思われるが、最後の一段は天保6年（1835）以前に失われた。歌詞は記録によって多少の相違はあるものの基本の詞型は五五七四、または五五七五で、これは定型律としては最古の五五調の名残を残しており、今日までうたい継がれている歌謡の中でも類例の少ない古調である。しかも、その旋律は六度の音程をもつ二つの音からなる素朴なもので、歌詞と旋律がともに残されているものでは県内最古といってよく、天保年間（1830～44）にはすでに中央に知られていた。

御田植祭でさらに注目すべきものは田植人形である。これは「デコ人形」ともいわれ神輿渡御に供奉し、早乙女が田植歌につれて早苗を植える田植式では畔に立てる。一般にデコといえば額、つまり「おでこ」をさすが、県内では自ら動くことのできない人形のことで、「デコ人形」といえば二重の表

現になるが、「デコさま」ともいうだけに、敬意を含めての表現かと思われる。

現在、田植人形は11体である。このうち神社の管理が10体で、白翁・黒翁・白ひょっこ・茶ひょっこ各1体と早乙女が6体あり、翁には幣束を、早乙女には早苗を持たせている。太平洋戦争前までこれらの人形は所有者が管理し、祭りには当主か家族の男性が持って供奉した。現在は「御田植祭典委員会」が他の役割ともに決めていて、主として中学生の男子があたっている。もう1体は神社に近い金田家が所有していて、毎年、祭りの数日前に蔵から出して衣装をつけ、上座に安置して供物を供え、金田家と縁のある方が持って渡御に供奉する。

これらの人形のうち翁と早乙女の数体は、渡御の一行為御田神社に到着するとすぐに御正作田に入り左回りに3回まわり、ほかの人形とともに田の畔に立てる。この人形は依代であることからこれも田の神の來訪で、重要な儀礼といえる。

7月13日は、早朝から御正作田で「早苗直祭」がある。神社のある北若の青年と下町の氏子たちが集まり、まず、神前に神饌と虫札等を立て供え、祭式がある。これより一同は御正作田に進み、田長の指揮のもとに準備しておいた早苗も運び込み、エンブリで昨日に植えた早苗の周辺をならし、さらに竹製の農具で筋をつけてから、田の全面に早苗を植える。

なお、早苗1株は本社に持ち帰り、早苗振祭に神前に供える。また、植え残った早苗を数本各自持ち帰り、田に植えるほか、一部の早苗は根元を洗って紐で結び、根を上にして家の入口の柱に下げる。これも魔除けという。直会のあと、一同には虫札を配布する。これを田の水口に葦に挟んで立てると、虫除けになるという。その後本社に戻って早苗振祭がある。

10月9日は抜穂祭である。早朝に神職・田長・氏子等が御田神社に集まり、祭式のあと、稻穂をミゴ（稻穂の芯）をつけて1本ずつ抜き取る。これを数十本まとめてミゴを半紙で包んで麻紐で縛る。2束作り、さらに交差させて縛り、末端を切り揃える。2組作る。1組はすぐに神前に供え、もう1組は本社の神饌所に保管しておき、新嘗祭に供える。御正作田の稻穂は後に刈り取り、精米して祭りに用いる。



田植人形



田植式



田植式

この御田植祭は、昭和55年（1980）3月に福島県の重要無形民俗文化財に指定され、平成27年（2015）3月2日には「会津の御田植祭」として、慶徳稻荷神社の御田植祭（喜多方市）とともに「記録作成等の措置を講すべき無形の民俗文化財」として国の選択を受けた。平成27年度には町単独で、同28・29（2015・16）の両年度には、国の補助を受けて詳細な調査を実施し、報告書を作成した。「会津の御田植祭」は平成31年2月8日、国重要無形民俗文化財として指定答申を受け、同31年（2019）度から映像記録の作成を予定している。

「獅子追い」にはこれまで町立高田小学校の高学年と、同中学校の全員が参加していたが平成30年から合併した町村の町立本郷小学校と同本郷中学校、同新鶴小学校と同新鶴中学校も参加するようになり、総数はこれまでの倍の800人ほどになった。教員も総出で協力していることに敬意を表したい。これは町の活性化の原動力になることは確かである。また、平成29年度には国庫補助により、神社管理のかなり傷んでしまった田植人形の仮面をすべて修復したことも、町民の熱意を高めた。

このようなことから町民の関心もとみに高まり、継承にあたって好ましい方向に進んでいるが、大祭だけに必要経費の調達には苦慮している。

さらに現在、田植人形など神輿渡御に供奉する採物を持つ主体は中学生である。近年、核家族化が進み、世帯数は増えているものの住民は減っているだけに難しい課題であるが、成人男性の積極的な参加が望まれる。そのためには同神社は会津の総鎮守といわれるだけに、町内の氏子に限らず、広く会津地方から参加を募るもの解決策の一つであろう。これは単に祭りだけのためになく、広く会津の町おこしにもつながるものと思われる。

伊佐須美神社は平成20年（2008）に社殿と神楽殿、それに収蔵庫などが焼失し、田植人形と神楽の仮面は焼失を免れたが、「獅子追い」の仮面はすべて失った。幸い用具はすぐに新調されたが、社殿や神楽殿などは未着工で、神社関係者と氏子が総力を上げて再建に奔走している。一日も早く往時の姿を取り戻すことが、全会津の住民の願いである。

②佐布川の早乙女踊

本町佐布川で継承されてきた田植踊で、地元では「早乙女踊」あるいは略して「早乙女」「そうとめ」と呼んでいる。佐布川は39戸の集落で、耕地は田が多く、かつては典型的な農村集落であった。会津藩が文化4年（1807）に編纂した『風俗帳』の城下の会津若松の項には「早乙女田植踊」とあり、当地でも太平洋戦争前までは「田植踊」ともいわれた。

会津盆地と南会津には約40か所に早乙女踊が伝えられていて、かつてはいずれも小正月に家ごとに舞い込んで豊作を祈っていた。当地も確かな伝承は聞かれないと、おそらく同様であったと思われる。今では伊佐須美神社の「御田植祭」に、7月12日午前の神幸祭のあと社殿前で、さらに午後に神輿に供奉して御正作田での田植式に続いて踊っている。なお、昭和15年代には、祭りの合間に町内の民家から招かれて庭先で踊った。

継承してきたのは佐布川青年会である。当会へは義務教育を修了して加入し、33歳で退いた。これが昭和42年に地区全員を会員とする「佐布川早乙女踊保存会」が結成され、それ以降は同会が継承にあたっている。

踊り手は20歳から25.6歳までの長男に限っていて、昭和10年代の一時期に長女が参加したこともあるが、他地区に嫁いで伝授されると靈力が弱るとされて、再び長男に限定した。近年は後継者難から長男に限らず、30歳を超えて踊ることもある。

踊り手の人数は、原則として早乙女は5名か7名、「えんぶり」は2名である。早乙女は女装で、

絆の单物に赤いけだしをつけ、浅葱の手甲、脚絆で前掛けを締め、二幅の手拭いで頬被りをして編笠を被り、白足袋に藁草履または麻裏草履を履き、赤い両襷をする。「えんぶり」も男子で法被風な单物に紺の股引きで、赤帯を締め、手甲をつけて、白足袋に草履ばきで、豆絞りの手拭いで頬被りをしてエンブリを持つ。

囃子方は六孔の篠笛と杵付締太鼓各2名である。歌い手は年長者のことが多く、袴に袴をはき、白

足袋に麻裏草履をはいて編笠を被る。歌は上の句と下の句を分けてうたうために、2名以上であった。

採物は羽子板1組と「棒」1本、それに扇子1本である。羽子板は鋤か鍬に見立てている。「棒」は長さ約1mの竹で、両端に長さ20cmほどの赤い毛糸の房を付けてあり、田を均すためという。扇子は白扇で、早苗に見立てるとともに千秋万歳を祝うものという。種目は「羽子板踊」「棒踊」「扇子踊」の3種である。

会津地方の早乙女踊の起りについては、会津藩が編纂した『風俗帳』が手がかりになる。これは寛文5年(1665)、貞享2年(1685)、それに文化4年(1807)の3回編まれたが、貞享2年が初見で、「大沼郡高田組」に「田植といふ 正月二月若き男五人も拾人も女の躰ニ衣装し郷村を廻り田歌を諷、米錢を貰」とあり、また「熊倉組(喜多方市)」には「正月 田植と申候てめすかたにこしらへ、或ハ三、四人五乙女とし其外太鼓をうち、田うへをうたひ、毎家ニかそへて米貰申候」とある。このほかに藩内各地に「田植」といって数人が女装して、早乙女に扮し、太鼓を打ち、「田歌」「田うへ」などといっている歌をうたって家ごとに巡ったと記載されている。しかし、いずれにも「踊る」とは記されていない。

これが文化4年のものには貞享2年と同様の記載がある一方で、城下の「会津若松」のものには「早乙女田植踊 近在の若男子、女粧に出立ち、早乙女の容をなし、笛、太鼓打ち、農歌及四民相なれし往古事を唄ひ、躍りて家毎に来る」とあり、類似した表記は慶徳組(喜多方市)等主として会津盆地の組に「早乙女田植踊」「田植踊」の名称に加えて「躍りて」「踊りあるき」「うたいおどりて」等と記されるようになる。これらのことから貞享2年頃にはすでに女装した若者が田植えに関する歌をうたいながら門付けをしていたが「踊」はつかず、文化年間からそれほどさかのぼらない時期に、まず若松城下で笛も加わり、「踊」がつくようになったと思われる。それにつけても「高田組」に属する佐布川の早乙女踊は、すでに貞享2年に芽生えがみられることから、その歴史は古い。この会津の早乙女踊が高冷地でしかも洪水でたびたび被害を受けた伊南川沿いの集落に急速に広まり、また会津から県北地方に、さらにはヤマセで凶作に見舞われることの多かった旧相馬中村藩内に一気に広まった。

佐布川でも歌詞は会津全域と同じものを歌っていたが、現在は当地だけ異なっている。これは明治5年(1872)に佐布川に生まれ、昭和13年(1938)年に亡くなった古川與一が創作したことによる。古川は知人とともに、当時旭寺入に住んでいて高山と号した神職の佐藤兼吉(安政6年(1859)生まれ、昭和5年(1930)没)のもとで学んだ。本来、早乙女踊は小正月に集落内を戸毎に巡って踊られるもので、当地もそうであったと思われる。それが伊佐須美神社の御田植祭に踊るようになって、祭りに相応しい歌詞ということで、佐藤兼吉の助言を得て作詞したのであろう。伝えによると大正10年



佐布川の早乙女踊り

(1921) 前後には新旧両者を歌っていた。

については伊佐須美神社の御田植祭に踊るようになった時期である。明治11年(1878)に町内に生まれ、20歳頃まで「獅子追い」に参加していた古老は、若いころ祭りに早乙女踊は行われていなかったという。また、明治44年(1911)に福島県の訓令によって編纂された「郷土誌」は大正3年(1914)と同5年(1916)の2つがあるが、いずれも伊佐須美神社での早乙女踊についての記述はない。これからのことから御田植祭に踊るようになったのは大正年間の早い時期と考えられる。そのために古川は御田植祭にふさわしい歌詞をと、新たに作詞したと思われる。

会津の総鎮守といわれる伊佐須美神社で行なわれるようにになったこともあるってか、会津地方の早乙女踊の中では、振りに一段と工夫が加えられ、洗練もされていて美しい。

この踊り手は、少なくとも貞享2年以前から地区内の男性に限られていた。のちに長男だけになり、一時、早乙女には女性があたったことがあるが、すぐに長男に戻った。近年、人手で不足から長男には限らなくなつたが、例に漏れず後継者の確保と高齢化に苦慮している。この踊りは、今では御田植祭りで重要な位置を占めるまでになり、会津地方の数多い早乙女踊の中でも洗練された美しい踊りだけに、できれば踊り手の地域を若干広げるなどして後継者の確保に努め、末永く継承されることを切望している。

なお、近年、町立高田中学校の生徒たちが活動の一つとして、習得することを始めたのは幸いである。さらに吹奏楽で奏しても十分に魅力のある旋律だけに、同校のレパートリーの一つとして普及に努めてほしい。

③高田の祭り囃子

伊佐須美神社の御田植祭には、町内の上町・中町・下町からそれぞれ太鼓台が繰り出され、祭り囃子を奏している。奏者と運営は各町の青年による上若(上町)・第一仲若(中町)・北若(下町)である。なお、引き手は町内の児童である。囃子は笛・杵付締太鼓・鉦留大太鼓により、曲は1種で、確かな曲名は伝えられていらず、口三味線で教えている。

太鼓台は四輪で、前輪が小さくて舵がついているために方向を変えるのが容易である。古い太鼓台には舵がついていないことが多く、当地でものちに手を加えたのであろう。

大規模で多くの人手が必要な伊佐須美神社の御田植祭に、さらに町内から3台の太鼓台が繰り出されるのは、町民の信仰の深さと、熱意の表れである。

囃子方は町内ごとに募った児童・生徒と成人で、ことに笛には女子の活躍が目立ち、年少ながら名手もいる。笛は最も困難な楽器で、いずれの団体も奏者の養成に苦慮しているだけに、これは特筆すべきことである。

祭り囃子は日本人がことに惹かれる芸能であるが、祭りには神社の行事に多数参加するだけに、並行して運行するのは苦労も多いと思われるがみごとである。

④高橋の虫送り

「虫送り」は町内では永井野地区や東尾岐地区でも行なわれていた。当地では宮川の東の尾岐窪と、



太鼓台(第一仲若)

西の冴・小山・仁王の2組に分かれ、虫籠^{かご}はそれぞれで作る。土用の入りの前日に行なわれるが、両地区とも数日前から中学3年生が主になり下級生が手伝って、作業小屋等の入口に筵等を下げて、「虫籠」が見えないようにして作る。現在は大人も手伝っている。両組で形態や手順は多少異なる。尾岐窪では「またがり」といっている二股の木を2本組み合わせて三角の箱型にし、青萱・藤蔓・草花等を用いる。尾岐窪の籠は「雌籠^{めかご}」、冴ほかの籠は「雄籠^{おかご}」いい、できあがるとかつては小中学校の男子だけであったが、近年は女子も加わり、尾岐窪では龍門寺でアジサイの花をいただいて上部に飾り、「萬虫送り」等書いた旗を立て、適宜虫をとて籠の前面から入れ、法螺貝を吹き、子どもは「稻の虫送るよ、たばこの虫送るよ」と繰り返し唱えながら、ともに宮川にかかる高橋に向かう。各区長は紋付袴で弓張り提灯を持って付き添っていたが、現在ははっぴ姿である。橋では僧侶によって供養が行なわれ、橋の上から虫籠を川に流す。古くからの姿をよくとどめていることから、町の文化財に指定されている。



虫籠



僧侶による供養

虫籠のつくりはきわめて丁寧である。ことに尾岐窪は複雑で、子どもたちだけでは難しく近年は高齢者が数日かけて作っており、後継者も育ちつつあるが、課題も多い。参加する子どもたちはこの日を楽しみにしていて、積極的に参加している。年齢差のある子どもと大人が一緒に行なう行事だけに、子どもの成長のためにも有意義な行事であるが、やはり子どもは年々減少している。夜の行事だけに保護者の協力なしには不可能であるが、地域の交流促進の観点からも地域を広げる等の方策も必要になろう。

⑤伊佐須美神社の太々神楽

社伝の出雲系神楽で、正式には「伊佐須美神社の太々神楽」であるが、一般には「太々神楽」とか「お神楽」といっている。

明治32年（1899）の記録によると当時は旧暦4月4日であった。のちに5月1、2両日の「高田講社祭」に行なうようになり、さらに昭和45年（1970）から4月29日の「花祝祭」の日になった。

神楽は社殿前の神楽殿で舞ってきた。神楽殿は間口二間、奥行三間の入母屋造で、正面の二間四



天地開闢

方を舞台とし、そのうしろは楽屋としていた。この神楽殿はすでに文政3年（1820）に建立されていて、ここで巫女舞が行なわれていたと思われる。ところが明治30年（1897）に社殿とともに焼失し、

同32年に再建されたが、これも平成20年（2008）に再び火災で失い、その後は拝殿で舞っている。

明治11年（1878）ころに伝来してから、舞は「高田講社」の講員によって継承されてきた。講員は長男に限らず、年齢の制限もなく、多くは17.8歳で加入し、70歳を過ぎると退いた。これが昭和50年（1975）ころに保存会を結成して現在に至っている。

演目は、清の舞・天地開闢・鉾舞・玉舞・剣舞・扇舞・弓舞・大蛇退治・幣舞・岩戸舞・軍神舞・事代舞・農耕舞・種下ろし舞・太平楽の15座である。

各舞の基本は最初に内回りといって静かに右回りに四方を巡り、次に外回りといって足を大きく上げながら、再び右回りに巡る。

囃子に用いる楽器は鉦留平太鼓（楽太鼓）、枠付締太鼓、篠笛で、原則として「のう」の囃子で舞台に入り、本舞になると「よつ（四つ）」・「かまくら（鎌倉）」・「ごしょうでん（御昇殿）」・「らんじょう（濫觴・乱調）」・「こまつ」と、太鼓だけの「タコタン」の六曲のうち一、二曲を奏し、再び「のう」で退く。

この神楽は、南会津郡南会津町田島の田出宇賀神社から習い受けたもので、田出宇賀神社でもそのように伝えている。伊佐須美神社では明治13年（1880）当時の内務省に「高田講社」の結成の許可を求め、同年に許可されており、当町の「横山七郎日記」にも明治16年（1883）の条に「御社にて太々あり、年々」とあることから、このころすでに盛んに行なわれていたようである。

田出宇賀神社の太々神楽は、郡山市安積町日出山から習い受けたものである。同社蔵の神楽に関する文書でもっとも古いものは、慶応3年（1867）の役付帳で、それには「稽古 日出山村神主佐藤伊賀正」とある。伊賀正は郡山市安積町日出山の日出山神社の宮司村山氏の祖先で、同家の系図によると明治2年（1869）に村山高樹と改め、同5年に59歳で亡くなっている。神仏分離まで神楽は近郊の神職が祭りのつど寄り集まって持ち芸を演じていたことから、伊佐須美神社の神楽はさかのぼれば郡山市安積町の神職が伝えていた、いわゆる神職神楽の流れである。伝来の時期は高田講社の結成からみて、明治10年（1877）から同12年（1879）までの間と思われる。

「天地開闢」に『古事記』に記載のとおりセキレイの作り物を出すのは、県内では極めて数少ない。郡山市の西部の神楽は安積流ともいわれて地方色がみられるが、今日、郡山市一帯ではかなりテンポが早くなった。それに対して当社の神楽はまだ古風な姿を残している。それだけに現在のテンポや芸態を変えずに継承することを望みたい。

現在、楽人は14名で、高齢化が進んでいる。衣装の着替えを考慮すると少なくともあと数名は必要であり、今後の継承を考慮すれば、若手も数名ほしい。幸いなことに、町立高田中学校の生徒たちが学校での活動の一貫として、平成30年（2018）度から習い始めたのは、今後の継承にとって明るい兆しだ。一日も早く広く公開されれば、保護者だけでなく町民の関心も一段と高まり、普及に貢献



大蛇退治



弓舞

することは確かである。

⑥伊佐須美神社の巫女舞

昭和40年代までは、御田植祭りに浦安舞も行なわれていたが、同社にはこれとは別に古風な巫女舞も伝えられていた。武井庸の「伊佐須美神社祭式記録」に「神楽歌」の歌詞と舞方と囃子方の座席図である「神楽座次」、さらに足どりを示した「巫舞足踏之図」が記載されている。種目は6曲であるが、2曲は奏することができます、さらにもう一曲は途絶えたとある。「神楽座次」によると、囃子は笛・小鼓・銅拍子・大鼓・大拍子・太鼓により、「巫舞足踏之図」によると鈴を持って、まず左に回り、次に右に、さらに左に回るという、回って回り返すもので、単純ながらこれは巫女舞の古い姿である。伝来の時期は明らかでないが、このような舞が伝えられていたことは特筆すべきことである。

福島県で今日もなお継承されている古来の巫女舞は、耶麻郡磐梯町の「巫女舞」と東白川郡棚倉町の都々古別神社の「七座の神楽」に含まれる「巫女舞」の二つである。当社の巫女舞は回って回り返すという巫女舞の最も古い芸態であっただけに、廃絶したのは惜しまれる。

しかし、今は廃絶したが耶麻郡猪苗代町の土津神社の「神楽」と伊佐須美神社の「神楽」は同じもので、両社は交流もあり、幸い猪苗代町教育委員会にかつての楽人が書き記した極めて詳細な記録が残されているので、舞の再現は可能と思われる。ただし、囃子について太鼓譜はあるが、笛の再現可能な旋律の記録はなく、これが大きな障害である。しかし、会津は北陸との交流が極めて盛んであっただけに、この地方の類似の舞が見つかれば、転用して一部手を加えれば不可能ではない。実現すれば町民の誇りがもう一つ増えるであろう。

⑦西勝の彼岸獅子

勝原字西勝に伝わる一人立ちの獅子舞で、地元では「彼岸獅子」あるいは「彼岸獅子舞」といい、明治初期の記録には「獅子踊」とあり、今日でもこう呼ぶことがある。一般に「獅子踊」というのはやや芸能化が進んだものの名称であるが、会津の獅子舞は全体的に古風であるのに、西勝の獅子舞は一部の種目に芸能化の兆しが見られる。

西勝は50数戸の集落で、現在ではほとんどが兼業農家である。舞い手は若者、のちの青年会員で、昭和42年（1967）に保存会を結成して引き継いだ。太平洋戦争前までは春の彼岸の7日間舞ったが、現在は彼岸の中日に集落の公民館に集合して衣装を整え、まずその前で舞い、次に関係者の前庭で舞い、さらに伊佐須美神社と御田神社にも奉納する。これより集落に戻り、集落の境と主な家を巡る。平成10年（1998）までは御田植祭にも供奉した。

種目は多く、16種を伝えている。会津の彼岸獅子は座敷で踊るのが正式といわれているが、種目の一つである三人による「唄流し」は「座敷踊」ともいわれ、その名残をよく残していて貴重である。「雌獅子かくし」は二人の雄獅子が雌獅子を奪い合うという基本はしっかりと守りながら、各所に当地ならではのやや芸能化した珍しい所作が見られる。さらに「弓舞」と「棒舞」という重要な種目も伝えている。ことに「棒舞」は雄獅子の一人舞で、横に保った棒に近づいては離れるのが古態であったと思われるが、ここでは棒に3回近づいては棒の下をくぐり抜け、後ろ向きで棒を握り2回（または1回）転する。このような所作は少ないながら他にも見られるが、やはり芸能化したことによると



唄流し

見てよい。また、獅子歌は他人に覚えられると獅子の靈力が弱ると信じられていて、聞き取られないように不明瞭にうたう。そのために歌を略してしまった団体が多いが、当地では9首の歌を伝えている。

このように特色、つまり地方色のある獅子舞であるが、やはり後継者難で、若手の参加が切望されている。町内には中学校が3校あり、西勝の生徒は町立高田中学校に通学している。それだけに後継者を西勝に限らず地域を広げて募るか、近年多くの例がみられるように、さしあたって雌獅子に女性をあてるか、あるいは町立高田中学校の活動の一つとして協力を得るほかに道はない。同校の負担も大きくなるが、岩手県内には1校で5種の芸能を習い受けているところもある。ぜひともなくしてはならないという使命感のもと、保存会で十分に話し合って知恵を出しあってほしい。

⑧盆踊と豊年踊

会津では盂蘭盆に「盆踊」を行い、秋祭りには豊作を祝う「豊年踊」を行なうところが多い。多くは同じ唄と踊であるが、他町には同じ踊ながら輪になって進む方向が反対になるところもある。

これが時代が下るにつれて、収穫のあと祝うよりは、前もって祝ったほうが確かにかなえられると信じて「豊年踊」の時期が早まり、ついには「盆踊」と一緒になった。しかし、本町内にはまだ別に行なっているところがある。

町内の盆踊（豊年）唄は、2つの流れがある。1つは「高田の盆（豊年）踊唄」で、これは北関東から東北南部にかけて広く流布している甚句系の「アレサ式の盆踊歌」の系統で、町内では高田地区だけである。町内他地区の唄は前半と後半をほぼ同じ旋律で繰り返すもので、やや古風といってよい。

かつて県内各地でひときわ盛んであった盆踊も、昭和30年代の「新生活運動」の普及とともに休止するところが続出した。しかし、近年、少しずつではあるが再興するところが見受けられ、ことに都市部で目立つ。これは地域の繋がりが薄れたことによる危機感から、地域づくり、つまり絆を再構築するための手段として再評価されたように思われる。その意味でさらに活用することが望ましいし、学校での文化行事や運動会に取り入れることも必要であろう。

○高田の盆踊と豊年踊

県内の数多い盆踊の中でも、三春の盆踊と並んで規模の大きいことではよく知られていた。昭和30年頃までは旧暦7月の4日間、伊佐須美神社境内の「高天ヶ原」に櫓を建てて夜明けまで踊り明かした。それ以降は「新生活運動」で旧暦を廃したために新暦8月になった。踊り手は町内だけでなく近隣からも訪れ、踊の輪は三重から四重になり、道路まではみ出した。現在は8月14・15の両晩だけになった。主催は上若青年会であったが、現在は各団体で構成する実行委員会があたっている。

さらに高田では盂蘭盆過ぎの8月下旬に御田神社の境内で同じ唄と踊ながら、はやばやと「豊年踊」



棒舞



棒舞

と名付けてうたい踊っている。両踊とも唄は「高田甚句」で、当地だけ町内他地区と異なっている。会津高田甚句保存会が編纂した「高田甚句集」には弘化年間（1844～48）に上州（群馬県）沼田からたびたび訪れていた麻商人が踊とともに伝えたもので、明治30年ころからこれまでの唄と踊をやめて、うたい踊るようになったという。伝承ではあるが、唄と振りからして、その可能性はある。振りは気品があって美しく、現在、会津を代表する盆踊の「会津磐梯山」の踊は、当町の赤留に生まれた山内晚水が、昭和22年（1947）に高田の踊に少し手を加えて生み出したものである。

○尾岐の盆踊

東尾岐地区の盆踊で、唄を「尾岐甚句」という。太平洋戦争前までは8月15、16の両日に、朝立神社の境内で踊った。これがのちに朝立神社の秋祭りである9月21日に豊年踊として行なうようになった。しかし、当地区は過疎化が進み継承が困難になったことから、平成9年(1997)から町内の民謡の師匠たちが旧尾岐小学校の児童に伝授し、各種にコンクールに入賞するなど、めざましい活躍をした。

囃子は鉦留大太鼓1個と笛2、3本で、旋律は「本郷甚句」や「新鶴甚句」「永井野甚句」と同様に、前半と後半を同じ節を繰り返すものである。

○本郷の盆踊

唄を「本郷甚句」というが、当地は「会津本郷焼」で知られるだけに「瀬戸屋甚句」の別名もある。かつては8月15日から17日まで踊り、最終日は翌日の日の出まで踊り明かした。囃子は笛、鉦留大太鼓、梓付締太鼓で、ことのほか華やかである。音頭取り（歌い手）は櫓にのってうたうが、太平洋戦争前までは踊り手もうたった。旋律は「アレサ式盆踊歌」ではなく、「尾崎甚句」や「新鶴甚句」「永井野甚句」と同じ系統である。

○新鶴の盆踊

新鶴地域では田子薬師堂の境内で、盂蘭盆に「新鶴甚句」でうたい踊っていた。田子薬師堂は新屋敷にあるところから、この唄は「新屋敷甚句」ともいわれている。これも「アレサ式盆踊歌」とは異なり、「尾岐甚句」や「本郷甚句」「永井野甚句」と同じ系統で、それらの中でも小節こぶし（少ない



豊年踊り

The musical score consists of four staves of music for voice and piano. The tempo is marked as♩=80. The lyrics are:

ほんぢやーーせどや
せどーーやくけむーはーチサーーチサー^チ
しろくやーーわけても
しろくーくせーくせー

新鶴甚句

♪ = 78 ぐらい

採譜 慎田弘訓

あすのナ - あき
くさであいはどこだ - さがせナ
かわらのコ - どてのな

古風な旋律)を伝えている。河沼郡柳津町西山では、朝草刈りの往来にも歌っていたという。(現在、新鶴地域では、境野で盆踊が行われている。)

○永井野の豊年踊

当地では「豊年大櫓踊」といい、熊野神社の秋祭りに「永井野甚句」につれて隣接する金刀比羅神社の境内で踊っている。祭日は10月の10.11の両日であったが、現在はそれに近い土曜と日曜日になった。主催は青年会である。踊の振りは「高田甚句」と類似している。囃子方は鉦留大太鼓一人と笛2、3で、櫓を設けるようになったのは明治年間以降で、それまでは太鼓を囲んで踊った。旋律は「高田甚句」と異なり、「尾岐甚句」や「本郷甚句」「新鶴甚句」と同様に前半と後半をほぼ同じ旋律で繰り返す。

⑨雀林の「へびの御年始」

雀林は89戸の集落で、現在はほぼすべてが兼業農家である。耕地は田が約7割を占め、水利には苦慮したようである。1月7日は「七日正月」といわれて、正月の重要な節目である。雀林の「へびの御年始」は、この日に行なわれる。かつて参加したのは集落の小学4年以上の男子だけであったが、現在は小学1年から中学1年までの男女である。午前8時ころに法用寺の山門に集まり、昨年作って山門にかけておいた「へび(蛇)」を下ろして一同で担ぎ、まず法用寺と区長宅をまわり、それより「エイエイオー」「ワー」と掛け声をかけながら、「蛇の御年始に来ました」といって戸ごとに巡る。各家ではご祝儀を出す。この「へび」は小正月に集落の東の田で行なわれる「サイの神」で焼く。

「へび」は稻藁を巻いて作ったもので、かつては長さ約で10m、太さが30cmもあったというが、近年は担ぎ手の子どもが減少したことからやや細く、短くなったのは惜しまれる。子どもたちが村まわりをしている間に、大人は山門で「へび打ち」といって新たな「へび」を雄か雌、年ごとに交互に作り、山門にかける。

古来より蛇や龍は水の神、あるいはその化身と考えられ、ことに水不足の地域ではそれを祀り、降雨を祈った。磐梯町の慧日寺では幕末まで龍の頭を持って龍ヶ清水まで行き、その頭を水に浸して雨乞いをした。法用寺の山腹にも龍藏権現(現在は意加美神社)があり、この行事はその信仰から始まったもので、行事として行なわれている例は県内では珍しい。

当地も例にもれず少子化で子どもが少なくなり、参加者は10人前後で、少なくとも15人はほしい。「へび」が細く短くなったのも、少ない人数では担ぎきれない

永井野甚句

採譜 慧田弘訓

こえ も や - よく
にたく る 一 は ざ は な い 一 一
もし も や - - き た
かとこ む 一 むねが せく 一 一



永井野の豊年踊り



へびの御年始

ことによる。今後、増えることも望めない。町指定の文化財で、類例が少ない貴重な行事だけに、対策が急がれる。民俗行事を当該の集落で維持していくことは理想であるが、建前だけでは不可能である。それだけに雀林出身者、あるいは雀林から他に嫁いだ女性の子どもの参加を認めてはとの話は出ているが、まだまとまっていない。高田地区は近く、児童は同じ小学校に通学しているだけに、呼びかけるのも一案であろう。容易に融和は図られ、長い目でみれば交流も促進される。このような例は近年多くなり、当地も行事の主体が雀林であれば、とくに問題はない。まずは保護団体の雀林で、住民全員の賛同が得られるようじっくりと話し合ってほしい。

⑩子守歌「ほらねろほらねろ」

肉親が愛情を込めて赤子をあやしながらうたう「眠らせ唄」は、「ねんねんころりよおころりよ 坊やのお守りはどこへいった…」とうたい出す「江戸の子守唄」がよく知られていて、全国に流布しているが、町内にはこれらとは旋律が異なる唄が伝来していた。伝承者がほとんどいないなかで、雀林の明治36年(1903)と同44年(1911)生まれの二人の女性が覚えておられた。

旋律は赤子をあやしながら語りかけることばがそのまま節になったと思われる素朴なもので、これほど深い愛情が込められた子守歌は少なく、その美しさは格別で、特筆すべきものがある。歌詞の一部が類似したものは他に見られるが、旋律は当地ならではのもので類例はなく、紛れもなく町の宝である。町内はもとより県内すべての小学生でうたい継ぎたいまれにみる名歌である。

(懸田弘訓)

ほらねろほらねろ

大沼郡会津高田町
採譜 懸田弘訓

♩ = 約68

()の音のこともある

6 美術工芸品—仏像—

本町の仏像の歴史は、今から1,200年前の平安時代前期より始まる。以後、平安時代後期から鎌倉、南北朝、室町と各時代にわたって連綿と続く。平安時代の仏像は、法用寺（雀林）観音堂に集中しているといつてもいい。しかし法用寺諸像より遡る平安時代前期の遺品が高田にある。

（1）平安時代

①個人蔵（高田） 木造吉祥天立像 国重文

像高が97.8cmで、頭体を通して方形の台座まで檜の一材より彫出されている。左上脣部半ばより先や右腕は、それぞれ別材を矧いでいる。現状では両手首より先を失っているが、左手には宝珠をとっていたものであろう。髪を両胸前に編んで下げ、背面では裳裾下まで長く垂らす。これらの髪もともに彫出されており、一木造が徹底されている。両頬が丸々と張りふくよかな顔貌で、腹部を前方に突き出した体躯は量感に溢れ、一木造の技法とともに重厚な造形を示す。吉祥天像では、福島県内では最古の遺品である。



②法用寺（雀林） 木造十一面觀音菩薩立像 2軀 県重文

法用寺観音堂には現在、2軀の十一面觀音菩薩立像が本尊として安置されている。『新編会津風土記』により、古くより本尊は秘仏で、親しく見ることはできなかったことが知られる。厨子に納められ、常に拝することができない。2軀とも一木造の像で、頭体の中心部を一材より彫出する。1軀は左腕は肘まで、右腕は指先まで頭体材より彫出され、もう1軀は両腕をそれぞれ別材とする。前者の方が一材で像の多くの部分を彫り出しておらず、衣の表現などに形式的なところがみられるものの、表情には野生的な荒々しさがあり、腹部を突き出した体躯にはいまだ重厚さがあり、より古様な造形がうかがえる。他の1軀は一層形式化が進み、衣の襞の彫出も浅く表情もおとなしい。ともにこの地で造立された像とみられるが、重厚さの残る像の方が古く、10世紀の造立と考えられる。他方は12世紀に入るであろう。



③法用寺（雀林） 木造金剛力士立像 国重文

法用寺で重要な仏像である。口を開けているのを阿形、閉じているのを吽形といい、もとは仁王門の左右に安置され、寺を守っていた。現在では、観音堂の中に納められている。阿形の像高が222.6cm、吽形が217.5cmである。上半身を裸形とし、腰には裳を着ける。腰を左や右にひねり、片方の足を踏み出して両腕を構える。筋骨たくましい、力感のあるすがたにつくられているが、左や右に腰をひねって足を踏み出す動きは穏やかなうちにまとめられ、筋肉の表現も同様で、体躯の調和は見事に保たれ、完成度の高い造形である。11世紀の造立と考えられ、当時京都で流行した仏師定朝の創始した様式を忠実に継承している。都でつくられたと思われるほどである。しかし両像とも檜材の一木造で、頭体を一材で彫



出し、阿形では後頭部及び体背面をそれぞれ割り矧ぎ、吽形では後頭部から体背面を不規則に割り矧いで、像内に刳っている（内刳）。材質、技法からみると、当地で造立されたものと推察される。いち早く、忠実に中央の様式を受容した作例として特筆される。

金剛力士像に対して、観音堂須弥壇上に安置されている持国天、多聞天の二天像は、修理の手が多く加えられているとはいえ、形式的な造形である。両像とも桂材の一木造で、基本的には頭体通して一材で彫出される。材地化した12世紀の造立と考えられる。

④常福院（新屋敷） 木造薬師如来坐像 町指定

田子薬師と呼ばれる薬師堂の本尊で、この像もこの時代の在地の一例として特筆される。像高が85.4cmで、堂々とした存在感を示す。桂材の一木造で、この像の場合は頭頂より両体側部をも含んで頭体通して一材より彫出されており、体躯が大きく木取りされ、内刳もない。脚部は横に一材を矧ぐ。堂々とした存在感は、このようなざっくりとした技法から生まれたのかもしれない。それを助長するのが造形で、頭部は螺髪の表現がなく、右肩から右腕にかかる覆肩衣と衲衣を着けるが、衣の襞の表現はまったくなく、背面は平滑に仕上げられている。この像の造形上の特異なところである。現状では漆箔が施されており、これはすべて後補のものである。『会津鑑』によれば、元禄10年（1697）に再興されたとあり、後補部はこの時のものと思われる。その際、表面が整えられたものであろう。平板で固い印象を受けるが、造立年代は10世紀に遡ると思われる。



（2）鎌倉時代

①弘安寺（米田） 銅造十一面觀音菩薩立像、地蔵菩薩立像、不動明王像 国重文

十一面觀音菩薩は「中田觀音」として、広く信仰を集めている。地蔵菩薩と不動明王が随侍し、このような三尊形式はほとんど例がなく、珍しい組み合わせである。十一面觀音菩薩は右手の第一指を深く曲げて他指を伸ばしていることから、もとは錫杖をとっていたものとみられ、奈良・長谷寺の本尊と同じすがたの長谷寺式十一面觀音菩薩と考えられる。中尊十一面觀音菩薩の像高が194.6cmで、銅造としては福島県内でもっとも大きい。この像の光背の裏に文永11年（1274）の銘記が刻まれており、これは菩薩像に対



する寺領の寄進などを記したものであるが、この頃の造立と考えられている。この銘記により、造立年代をある程度明確にでき、大きさとともにこの像の価値をさらに高めている。三尊とも頭体の根幹部を銅造一鋸とし、漆箔を施す。十一面觀音菩薩と不動明王の両腕はそれぞれ両肩から先を別鋸しており、地蔵菩薩では両体側部をそれぞれ別鋸とする。三尊ともがっちりした力強い造形で、顔貌表現や胸・腹部の肉付けはふくよかさを保ちつつ充実感があり、衣の襞にも自然な流れがうかがえる。

当地で造立されたものと考えるが、鎌倉時代に盛行した慶派の正統的な様式を継いでおり、高度な造形力を示す。

②法幢寺（法幢寺南） 銅造阿弥陀如来及び両脇侍立像 国重文

この町で数少ない銅造の仏像として貴重な、もう一つの遺品である。阿弥陀如来の像高が47.7cm、左脇侍が34.9cm、右脇侍が35.3cmで、この三尊では中尊阿弥陀如来の背面に建治2年（1276）の刻銘があり、「奉鑄」とあるところから、この刻銘が造立銘であることがわかる。さらに「善光寺阿弥陀如来」とあり三尊が長野・善光寺の本尊を模した善光寺式阿弥陀三尊であることがわかる。中尊阿弥陀如来は左手を垂下し、第二・三指を伸ばし、他指を捻じ、右手は前に出して五指を伸ばす。両脇侍である觀音・勢至菩薩は両手を胸の前にあげて両掌を上下に合わせる。善光寺式三尊独特の印相である。三尊とも銅造一鑄で鍍金を施す。阿弥陀如来の両手首より先、両脇侍の両肩より先はそれぞれ別鑄とする。前記弘安寺像よりかなり小さいが、善光寺式阿弥陀三尊像としては一般的な大きさである。造形的には弘安寺像のようなどっしりとした大きさはないが、衣の襞の彫出などは伸びやかで写実的にあらわされており、頭体の調和も程よく保たれており、同様に慶派様式を忠実に受け継いでいる。



③観音寺（宮ノ腰） 木造十一面觀音立像 県重文

弘安寺銅造十一面觀音菩薩立像の木彫原型ではないかといわれている。像高が197.3cmで、右手の第一指を深く曲げて他指を伸ばしている姿である。大きさ、姿は弘安寺像にほぼ近く、造形的にも共通するところから、木彫原型の可能性は十分にあると考えられている。寄木造で、両眼には水晶製の玉眼をはめ込む。頭体を通して前後に二材を矧ぎ、三道下で頭部を割り矧いでいるようである。『会津旧事雑考』によれば、文永2年（1265）に觀音堂が建てられたとあり、この像の造立もこの頃と考えられる。



④福泉寺（八木沢） 木造薬師如来坐像 町指定

⑤鳳来寺（福重岡） 木造薬師如来坐像 県重文

福泉寺と鳳来寺の両像は、ともに野生的な力強い造形で、当地方で慶派様式を習得した仏師によって造立されたと考えられる遺品である。福泉寺像の像高が103.5cm、鳳来寺像の像高が77.7cmである。両像とも

